The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞カンタン・メイヤスー ： 千葉雅也・大橋完太郎・星野太（訳）『有限性の後で―偶然性の必然性についての試論』
Author(s)	大門, 大朗
Citation	災害と共生. 2018, 2(1), p. 33-35
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68240
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

カンタン・メイヤスー 千葉雅也・大橋完太郎・星野太（訳）『有限性の後で—偶然性の必然性についての試論』，人文書院，2016 年 1 月，235 項

大門大朗[1,2]
Hiroaki DAIMON

１．『有限性の後で』における問題提起と災害研究

ここ数年、人類学・哲学の領野で、言語論的転回に代わる新たな、存在論的転回が叫ばれている。一言で言えば、「もの」それ自体をもう一度思考し直せるように哲学、広義には人文・社会学を位置づける試みだと言えよう。本書評では、この存在論的転回の火付け役となった、思弁的実在論を標榜するメイヤスーの主著『有限性の後で』を取り上げることとする。しかし、評者はフランス哲学に詳しいわけではないし、こうした試みは既に幾つかの書評で成されているため（千葉, 2016; 平田, 2016; 磯, 2016）、ここでは『有限性の後で』の詳細な内容に立ち入らず、『有限性の後で』が提起する二つの問題に焦点を当て、災害研究における人とモノの共生について、社会構成主義の理論的更新の可能性について議論することとしたい。

２．「祖先以前性」と災害研究の分水嶺

はじめに、メイヤスーにおける議論の最もラディカルな概念の一つである「祖先以前性」について説明する。この祖先以前性は、カント以後の哲学すべて——もちろん、筆者の属する社会構成主義の立場も射程に入っているだろう——を批判する広範な概念である。モノそれ自体はわれわれの思考に相関する形でしかアクセスすることができない、「相関主義」に陥っていると指摘する。つまり、モノそのものを認識することは出来ないが、われわれの思考によって、モノ自体へとアクセスすることはでき、我々はその相関項にのみアクセスできるという立場のことである。

ここで、メイヤスーは指摘する。では、その当の思考そのものが存在しない（与えられない）中で、モノそのものを思考することはどうして可能であるのだろうかと。我々の祖先以前的な言明、例えば、「〇〇億年前に、地球が生成した」という言明は、相関主義においては位置付けることができないとメイヤスーは指摘する。そうして、こうした思考が不在する時点においてカント以後の哲学は、モノそのものへと思考することができなくなったとしている。メイヤスーは5章においてこうした転回を、自然科学のコペルニクス的転回と対比しながら、ものの周りを思考が回るのではなく、それとは反対に思考の回りをものが回り始めたプトレマイオス的転回であると結論づけている。

ここでは、思考が存在し得ない中での科学的言明の位置付けについて、こうしたコペルニクス／プトレマイオス的転回から、災害研究においての問題点を考えてみたい。特に簡便のため、自然災害におもに着目することにしよう。まず、日本国内における、災害研究を大きく分けるならば、自然科学を主なパラダイムとした一派と、そうでない人文・社会科学を主なパラダイムとした一派にわけられるだろう。無論、評者の研究は後者の人文・社会科学に属するわけだが、こうした分断はメイヤスーが指摘する「祖先以前性」によって明瞭に理解することができる。

まずは、人文・社会科学において考えられうる災害の定義に着目するのが良いだろう。様々な解釈があるが、「災害は社会的に構築されたもの」とする Oliver-Smith（1999）の例がわかりやすいだろう。ここでは災害は社会的に構築されるものであり、いかに大きな災害が起きようとも、我々の生活に何らかの被害や影響を与えない限りそれは災害とはならないのである。こうした例は、もちろん共時的な意味でしか無いが、更に通時的に——思考の与えられ以前に——拡張すれば、我々の思考に相関する形でのみ、災害というものが定義づけられるというものである。例えば、数万年前に果たして三陸沿岸に津波が来たかどうかは災害でないどころか、それを問うことは、人文社会科学においては意味そのものを成さない。そこには、江戸時代に書かれた書物や言い伝えなどによって、漸近的に災害に接近することしかできない。

一方、自然科学は強力である。例えば、『防災辞典』（2002）においては、自然災害とは「地震、台風

*1 大阪大学大学院人間科学研究科 大学院生
Graduate Student, Graduate School of Human Sciences, Osaka University
*2 日本学術振興会特別研究員（DC1）
Research Fellow, Japan Society for the Promotion of Sciences

（ハリケーンやサイクロンを含む）、集中豪雨、津波、高潮、洪水、干ばつ、地すべり土石流、なだれなどの以上の自然化が威力（ハザード）によって国土、身体・生命、財産が被害を受けることである」（p.125）。身体・生命、財産などの言及はあるものの、強調点はむしろ主語である現象そのものにあるといえるだろう。そこでは、太平洋の名も知らぬ無名の無人島に津波が襲おうとも、数千万年前に恐竜を絶滅させたとされる隕石災害についても、将来起こりうる全く知らない「災害」についても原理的には記述が可能である。もちろん、「今後三十年以内に〇〇％の確率で地震が起こる」といった言説は、その確率導出が、我々の経験的に受けたであろう過去の災害の頻度に依拠するという点で（このように概括しても大きな問題は無いだろう）、実は、人文社会科学的な相関主義的言明に近づいており、こうした記述はメイヤスーにとっては、現時点で、数学的にしか意味を成さないと言えるだろう。

しかし、ここで評者が問題提起したいのは、こうした人文・社会科学の不能性が問題であるということではない。むしろ、思考の欠如する「祖先以前」的言明に係る問題を処理できない／処理できるということに端を発する分断が、災害研究において自然科学と人文社会科学との研究の間に埋めがたい溝として横たわっていることである。そもそもの不能性に淵源を発する二つの立場が、研究という水準で全くの対話の行われ得ない災害研究を生み出しているのではないだろうか。もちろん、こうした分水嶺が分業という構造で乗り越えられた時代はよかった。しかし、現代の日本社会において福島原発事故や東日本大震災などもはや単一の学問では乗り越えられない問題が見られ始めた中で、そして一方で科学的な言明が十分な政治的影響を持つようになった中で、一般市民が知る由もないこうした研究レベルの分断を根本的に再考する必要があるのではないだろうか。こうした意味で、両分野ともにもう一度、思考とものそのものを位置付け直す試みが必要であると考えられる。

３．グループ・ダイナミックスにおける受容の可能性

二つ目に、著書全体に通底する「偶然性（の必然性）」、その唯一の絶対的存在者である「ハイパーカオス」から導かれる、ものの位置付けについて説明する。その上で、上述した人文社会科学の不能性の問題を解消するような理論的受容が可能かどうか、特に評者のメタ理論である社会構成主義において検討する。まずは、本書を紹介する所に立ち戻ろう。

メイヤスーは、世界における偶然性を二つの水準にわけている。我々が普段イメージする確率論的な「偶然のめぐり合わせhasard」と自然科学の法則そのもの（例えば重力の法則）も変容しうるという「偶然性contingency」を区別する。更に、この「偶然性contingency」すらも変容しうるということだけが必然的であると導く点でメイヤスーの議論は独特である。そして、こうした偶然性を生み出す唯一の絶対者としてハイパーカオスを挙げている。こうした世界内存在における我々は、こうした全く偶然的な（自然法則そのものが変容するという水準で）世界にいる我々は、世界全体の公理すべてを思考することはできないとする。

このような議論は幾分突飛なものに移るだろう。しかし、このレベルの偶然性を思考することで一体何が導かれるのだろうか。そこで、『有限性の後で』の訳者の一人である千葉（2015）の議論、つまり、メイヤスーの思弁的実在論に端を発する存在論的転回全体を俯瞰する議論を参照軸とするのが有益であろう。こうした思弁的実在論（あるいは、新実在論）を包含する概念として、「非人間的転回」を千葉（2015）は挙げている。そこでは、こうした思考そのものが失われたなかで、モノそのものを、もう一度思考するというそうした射程が含まれているという。

その中で、千葉は興味深い指摘をしている。「［思弁的実在論は、］社会構築主義―をベースとする文化・批判理論―とは相容れないように思われるかもしれない」（p.116;［］は引用者）とした上で、そこで最も問題となっているのは、「社会的な私たち自身に社会のまったくの外部としての存在様態をみとめるならばどうだろうか、という問題」（p.109）にあるとしている。メイヤスーらが標榜する「非人間的転回」を考える上では、解釈不可能なものに漸近するために終わりない解釈を加えるモメントではなく、思考停止でもって遇する〈無解釈的なもの〉を対峙させるモメントでなければならないという。

さて、メイヤスーの『有限性の後で』を拡張的に読むならば、ここが踏み越えであろう。つまり、人間中心主義であるグループ・ダイナミックス＝社会構成主義にとってではない領野への権限譲渡が可能であるとするか、あるいは、認められないとするのか。評者は、前者の可能ではないかという立場に対して、前述した災害研究の分断を乗り越えることができる可能性を見ている。

充分な検討が必要であるとは言えるものの、評者

としては、こうした乗り越えは、社会構成主義及びグループ・ダイナミックスにおいて、意外にも大きなダメージを受けること無く理論の更新が可能ではないかと考えている。それは、我々が普段、相対する、人間としての他者に接する実践と同様に、ものにも他者性を付与することで可能である。こうした立場は、モノと人を同様の水準で（準モノとして）扱うアクターネットワーク理論（ラトゥール，河村訳 2008）と親和的な地平として再構成しうるのではないだろうか(1)。無論、モノのどうしようもない偶然的な他者性を認めることにはなるだろう。モノと人、モノとモノから立ち現れる規範にも目を向けなくてはならなくなるだろう。しかし、それは、これまでの理論・実践的研究を訂正はするものの、放棄することなしに人とモノとのあり方に向けた研究を拡張しうるのではないだろうか。

４．結びに

ここまで、メイヤスーの『有限性の後で』に依拠しながら、「祖先以前性」に係る災害研究の分断と、「ハイパーカオス」から導入される他者としてのモノを扱う可能性について論じてきた。もちろん、こうしたモノの復権には、人間中心主義者からの非難が寄せられるに違いない。しかし、我々が失うものは絶対的な必然だけである。それは、人間になんとかし得る世界だけではない、人間にとってどうしようもない領野の存在である。そして、我々の人文社会科学においてものそのものを位置づけることは、偶然のめぐり合わせ、あるいは偶然性（コンティンジェンシー）すらも錯綜する災害という文脈において、研究者と市民の科学コミュニケーションの関係を超えた、研究者と研究者のインテグレーションを加えた、新たなヒントとなりうるのではないだろうか。

補注

(1) 例えば、社会構成主義の立場から、杉万（2009）は、自然科学と人文・社会科学（あるいは、人間科学）の言説空間の違いを、「人称的／没人称的」の軸と「知覚現場的／概念思考的言説」の軸から分類し、主観的言説に対する人間科学の優位性、そしてその「守備範囲」の違いを理解した上での共同研究の重要性を指摘している。しかしながら、ここでの立場は、分断の後で統合するという立場ではなく、その分断以前において思考するという意味で根源的である。

参考文献

ブルーノ・ラトゥール 川村久美子（訳）（2008）. 虚構の〈近代〉 新評論

千葉雅也（2015）. 思弁的実在論と無解釈的なもの 大澤真幸・佐藤卓己・杉田敦・中島秀人・諸富徹（編）『岩波講座現代 7 身体と親密圏の変容』岩波書店（pp.107-129）

千葉雅也（2016）. 世界の非理由、あるいは儀礼性：メイヤスー『有限性の後で』から出発して 比較文明, 32, 57-61.

平田一郎（2016）. 『有限性の後で 偶然性の必然性についての試論』 比較文明, 32, 62-67.

磯直樹（2016）. 『有限性の後で』とフランス哲学界 比較文明, 32, 68-72.

日本自然災害学会（2002）. 防災辞典 築地書館

Oliver-Smith, A. (1999). “What is a Disaster?”: Anthropological perspectives on a persistent question. Oliver-Smith, A. & Hoffman, S. M. (eds.) *The Angry Earth: Disaster in anthropological perspective*. New York: Routledge, (pp.18-34).

杉万俊夫（2009）. 人間科学における主観的言説の重要性 集団力学, 26, 1-13.